

は し が き

視聴覚メディアにおいて、情報の送り手は、どのように伝達内容を構成し、どのような意図で送り出しているのだろうか、また、受け手は、どのようにそれらを理解し、学んでいるのだろうか。

今日の情報技術革命の波は高等教育や遠隔教育にも、多くの新たな可能性を産み出している。しかし、このような基本的な問に対する答は、十分明らかにされていない。

本書は、メディア教育開発センター共同研究『メディアを利用した学習方法の最適化に関する研究開発』のサブテーマ「映像メディアによる学習過程の研究」の最終報告書である。

共同研究の目的は、新しいメディアによって急速に多様化しつつある学習者に対して、個々のメディアがどのような影響を及ぼすかを明らかにし、最適なメディア活用のあり方について検討することであった。

このため、「教授学習評価支援システムの研究開発」、「メディア学習実態の調査研究」、「映像メディアによる学習過程の研究」、「双方向メディアによる学習過程の研究」という4つの下位課題を設定して研究を進めてきた。

「映像メディアによる学習過程の研究」の目的は、新たなメディアの中心的な役割の一端を担う映像情報が、学習のどのような側面に効果をもつのか、また、どのような種類の映像情報が特定の学習者に対して効果をもつのか、ということを解明することであった。

本研究プロジェクトは、平成9（1997）年度から平成12（2000）年度まで4年計画で行われた。主査は、平成12年9月までは大塚雄作教授であったが、ご転出にともない、同年10月から平成13年3月まで、伊藤秀子が担当することになった。

この報告書は、本サブテーマの出発点となる共同研究にまでさかのぼり、今年度までの15年間の研究成果をまとめたものである。

序では、この間の研究の経緯と研究成果の概要を紹介し、今後の展望についてのべている。

第I部では、故藤田恵璽名誉教授の著作と講演記録を掲載している。藤田先生は、本センターの前身である放送教育開発センターの創成期から、“映像教材を科学的研究の対象にする”ための研究に多大な貢献をされてきた。

第1章は、先生が、着任されて最初に手がけたプロジェクトについて、研究計画のための考察と予備調査の結果をまとめられたものである。この論文は、当時センターの刊行物であった、MME研究ノート第44号（1987）に掲載されたものである。しかし、特に、I コミュニケーションとメディアの発達では、人間とメディアの関わりについての深い洞察と基本的な問題提起がされており、今後の研究の展望を考える際の示唆に富んでいる。今日では、所内でもMME研究ノートを目にすることは少なくなったので、本報告書に転載することにした。

第2章は、藤田先生が当センターを退官される際、ご在職中の研究成果について講演された公開研究会の記録である。

第3章は、研究のアプローチや共同研究のあり方など、藤田先生から学ぶべきことを、長年、先生にご指導いただいたものの一人として、伊藤がまとめたものである。

第Ⅱ部第1章は、メディア教育開発センター研究開発部の研究会における活動報告である。当日は、客員教官の黒須正明先生（静岡大学）の放送番組の画像構成とわかりやすさに関するご発表、井出定利先生の番組制作の立場からのコメントのほか、伊藤が、映像メディアによる学習について、センターで行ってきた研究成果を発表した。

第Ⅱ部第2章は、その後、教育番組の画像構成と視聴者の満足感の関連について研究を進め、まとめた結果である。

実は、この研究報告書は、もっと早く刊行する計画であった。特に、藤田恵璽先生のご講演については、平成6年3月の公開研究会の直後に逐語記録の作成を開始し、ほぼ完成していた。しかし、その後、われわれの研究プロジェクトの主テーマが大学授業の改善に拡大されたこともあって、それに関連した研究報告書のシリーズ（「大学の授業改善Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」、放送教育開発センター）や『ガイドブック大学授業の改善』（伊藤秀子・大塚雄作編著、1998、有斐閣）の発行、研修事業などに主力が注がれることになった。

この間に、「視聴覚メディアによる学習」の研究は細々と続けてきたが、いつも、多くの研究成果が未公開のままになっていることが気になっていた。そして、藤田先生のご講演については、ついに、ご存命中に報告書を見ていただくことはできなかった。先生には本当に申し訳ないことをしたと思っている。

今回、現行の共同研究の最終年度にあたり、曲がりなりにも、15年間の成果をまとめることができ、ほっとしている。その時々で興味を持った課題に一生懸命取り組んできたが、これらをこうして振り返ってみると、その時には気がつかなかった、相互の関連性を見い出すこともできる。

本研究テーマについては、平成13年度から新たに発足する『メディアFDとフレキシブル・ラーニング支援の研究開発』（主査佐賀啓男教授）の研究フォーカスのひとつである「学習評価支援」の中で研究を深めていきたいと思っている。

最後に、本研究の推進にあたりご支援いただいたつぎの方々に心から感謝の意を表したい。

前所長、天城勲先生、加藤秀俊先生、現所長、坂元昂先生；前研究開発部長、阿部美哉先生、福井芳男先生、喜多村和夫先生、菊川健先生、近藤喜美夫先生、現研究開発部長、永岡慶三先生；共同研究前主査の大塚雄作先生はじめ、歴代の共同研究のメンバーの先生方（本報告書のiページおよび、第Ⅰ部第2章の資料にお名前をあげさせていただいた。）；研究協力課の専門委員、田中穂氏、金澤幸紀氏はじめ、歴代のスタッフの方々；本報告書の編集作業をお手伝いいただいた町田春菜さん、魚崎祐子さん、山本裕子さん、西部由布子さんをはじめ、歴代の事務補佐員の方々。

本報告書について、多くの方々のご関心とご助言を賜るよう心から願っている。

平成13年1月

共同研究主査

伊 藤 秀 子